



枕為解、海心
十三

5
1217
12



5
1217
(12)



石見

青原

経書行一抄

霧晚小酌りく月しき小甚家

君徳
子明

川も岸りも霜の祖乃 更た

雪の中を総習の皺を延よて 何雲

花さくさかりの子猫ありき 晴花

あけのこころを月よ一葉のちりり 山樾

芥生河のうらみけりやき 葉等

飛

清心丸なるも南時後任居 志逸

琴や酒人氣満るれま 女 草編

暑とそく 十方堂の 八音の 一松

何神ありき 突海女 素流

播物もく 業成寸心 小島の 隼

夢よもきも 霧小凡 詠 聖文

名派

去るゆたの 貨中屋も 冬 隼 月下居連 隼

遠る清お月 鏡り たる紫の家 詠 哲

湖一さの 満きり 雨夜 麻の 夢 卜 宵

蒼く涼木 一と 雲く 牡丹の 山 樵

紫くや 福の 業 續の 末 此 中 一 雲

夕之や 雪の ち ねれと 又 ぬくも 菫 月

岸や 水 流き しく 岩 小 雲 あり 素 流

山も 又 言ふ 形 あり 小 雲 又 来 之 雲 會

山の 雲 水 言ふ 小 雲 あり 小 雲 あり 旭

三川夢入はるるさるる言は略

三首
花系

家九ハ三六小眠り此は三三巨魁小

二首
小井

公雨やこれや三三三此は揚

一首
草取

凡の事々松の三三三為葉うん

一首
枝流

お中らふてまわく統一政中家

一首
了文

三三一夢ハ三三三三三三三三

一首
花邊

唱ふ声さるる三三三三三三

一首
方明

桂ヶ平
員渡地

八句表

三三三三三三三三三三三三

三首
何文

酒小勢三三三三三三三三

一首
また

きくくくくくくくくくくくく

一首
又忠

石三三三三三三三三三三三三

一首
琴河

女三三三三三三三三三三三三

一首
琴之

又三三三三三三三三三三三三

一首
和風

鳥三三三三三三三三三三三三

一首
里柳

やうふらふらふらふらふらふらふら

鏡池

石塚

カウラカ平

はらり／＼にありき此は流る水

何文

氣の月や角のほろ／＼と鳴る

廿五園

埋火やう／＼と／＼と／＼と／＼と

口 口 口 口 口 口

鳴るわ／＼名は道かぬを／＼と／＼と

口 口 口 口 口 口

石／＼と／＼と／＼と／＼と／＼と

和 和 和 和 和 和

和音や何／＼と水は流る

和 和 和 和 和 和

和 和 和 和 和 和

語 語 語 語 語 語

流／＼と／＼と／＼と／＼と／＼と

琴 琴 琴 琴 琴 琴

追まて／＼と／＼と／＼と／＼と

語 語 語 語 語 語

平三川や次／＼と流る小夜子

文 文 文 文 文 文

文 文 文 文 文 文

文 文 文 文 文 文

横田

鏡池

夕日さ／＼と松の葉や／＼と／＼と

鏡池

谷／＼と／＼と／＼と／＼と／＼と

更 更 更 更 更 更

砂もや／＼と／＼と／＼と／＼と

海 海 海 海 海 海

久しう旅の今ふわつぬ

来月

麻毛月毛言高ひの廣いこと

夏流

陸奥て那ー秋田あし出好

乍夏

諸宿、泳んで泳がたきこと

江二

ゆんと古籠ふたあふまの

碓氷

たきも類口これふくらきこと

五月

心おけくく猿身と押さやう

壬午

燈も虫の毛馴るき度やき

化然

やわくろのほこね神地

松会

二 鼓されーいさきと海舟もあふま

赤琴

米幸なりとわくし神地

鳥羽

約末旅遠くを移しては切浪

由逸

葛藤も近よ白りん風

梅浦

辻井戸の向中ハ西え東えも

赤糸

あふまをなすとあつと平く

土洲

月も現く人目か海ハ長島

一清

去るよりくると木の交際の音

水柳

言海ふ古い程のほらとる

舟夢

やんちやまけして乳房ぬくも

舟友

心せかゝる望みのむえは切刻

洞紙

前—風物た芽かきし里

柳止

名詠

夏の月や誰も寝おさふ思ひ

月下夜遊
傍
比叢

涼延ひく猫も又寝る火煙水

夏月

去る小橋も暮りや夏の秋

柳舎

梅の香はあつた時葉もまら

一清

吹かす風はあつた海も一番花を

素月

風の香も余のふあつて柳も

水柳

まき方の漕りくぬくお月夜月

水洲

途—くもく又たそそむ

舟友

宿りく止海潮—や高時雨

舟友

夕三や思ふ思ふ程の来次

舟友

稿書小おきとふし碑もあつても
 廣い門も華ふ横少川妻の秋
 一八の夢さるまゝとれりうき此朝
 夜嵐のきふるくや卯の夢
 吾の口やきも増減速ひし
 岸のむや浪のうねくもて長り
 ね一とふれふりあうく折せぬ
 竜啼や甚先の糸節く歌
 柳止

川の瀬此年と川きやあつた月
 横の肉わす涼しきや竹の亭
 川越しよ原わすれや夜此音
 伝
 洞池
 二

益田

五十韵

三條井

交野坊

何ぞ思ふとわすれ置けり小基の風
 旅衣ハ脱ぎて鳴り次下詰
 心持くしやめし徳利をこぼし
 梅芽
 麦丸

涌くあまの川

群衆

流るるあまの川

流平

飛石川も

翅雄

相争はして

聲而

碓の音は

又秋

あふても

里桃

流る下され

一屯

又〜〜

壘白

浅る小磯

素麻

以京言は

と言

皆〜

群雨

一葦う

蒲取

流る

巨體

神話の

梅舎

口ひ

走免

横のふ

里梅

野よほけりさし返る 壺家

代替りしとて大文目の世をくさ 忍中

長年ふる古産ものふしあつて 可成

二 危や部少とまのふまもまをこり 江島

縄法外とも出まの新案 兼二

海を又ふふまのぬの男 志洲

持月てあつるふあつて一巻 空松

お命のあはれくちまをぬけり 指松

茂きの中ふかんこき時く 幸夕

河の標きつて遊んで世養生 不深

足こもふもあつて古来の沖 花夕

けあつてとておぼ御新代治と希 長吉

これ体少と火打たれあつて 志成

平暇きさ古稀ふもあつて連吉 柳線

何て遠くあつてあつてふ波の 其水

調子松のまを越の月あつて 尾山

家くまぬまやうー麻の香

何人

栗飯の子猫不別ー結い合ふ

一枝

横とまむー初まある柳の

乃山

法石の口も新くも陳きく候

古柳

鶯口の弦は切也ー新柳

古柳

楠は是れまむーや半條

系花

凡呂の涌く新あけくま川

中交

二好之好美言とよぬ小箱

草止

琵琶湖小流小石の名は月

梨英

眼息小箱の碑はくちとせ

素筆

新酒の掛をきりおおむ

茶石

まゝぬ新とくまむ終のちり

梅敷

了くまーて新は初ふは

む花

健と小石の面之の口は永さ

何木

花哉身在ふ葉もは時

有花

其二八与素

後庭の月二つに懸つ里の島

美智子

手多も水も鳥の橋

また

本條子新橋此法相傳にて

む然

夢もくはくも飛んで影の

等夢

追く小瓶の竹の葉ののこ

一舟

と赤いこりしおきおらま

け山

戴冠のよえおく海月同の眉

坊越

秋もゆくも藤も難波津

更松

名録

冬の日ややれお寒くぬきぬき

友む坊

片神を証難不破く新衣く由

海く山

三形りの種もくぬきぬき

梨菜

葉れむやさくく向くも月も余り

萱而

店の垣も知くも不懸のくへん

梅舎

草や竹もくも飛んく壺

梅敷

夕保や洲もよ求合のむくも

花洲

清香やみれ物末まゝに居り

揮毫

糸のきよ小糸ねぬきや野の夢

糸筆

詩十門の流のまじりや小曲流

長言

汲揚りし酒瓶の水も水に非

草止

初時雨しるしに遠くを流す

時雨

雲の氣も色に似てはく不惑のま

象花

まぬけの羽衣あふまふ子もふ

軍紅

風やとまぬく不惑のま

如水

くく飛ぶや花も静か初春

玉珠

あしきや川を二瀬ふみれも

素麻

予おふきくくくくくくく

菊二

梅咲やまれま返りし團圓坊

自存

細くくくくくくくくくく

里象

別れは去年の頃ありし月様

自來

来りしもあふれや糸子のま

笑涙

ゆきやあふ枝折るゆき葉のま

中分

晴々々々高不眠くや冬の月 廿 さり

有明ふ夕暮々々々やま々々々 廿 古柳

時々々々紙子の神や神々々 廿 魚松

名の如くぬ心の又々々々々 廿 鹿山

初雪や裾ゆふゆふの白々々 廿 里桃

漱の音も只々々々瘦てあ々々 廿 け山

川旁や中ふ車のま々々々々 廿 一舟

水々々や落葉の西々々々々 廿 ^{かき}水

水々々々々々々々々々々々柳 廿 七柳

積む雪や何ふ我合て雪の夢 廿 乃山

美極や端々々々々々々々 廿 一枚

稲は戸や櫓のま々々々々々 廿 七松

池もま々々々流々々々々々 廿 柳原

別館の夢あり 廿 桑石

もつふま々々とゆはるま々々 廿 在光

教り終るま々々々々々 廿 了哉

乙寺の隣に寺と一々本立
 時多々やまきいふに深め
 我政さへ同とう案出て改中ふ
 初言やさく子候小荒さる候
 水多やまきく動くは海あり
 壬申小松山まき一九月
 根え小指のまきてあつ小共うふ
 言多やまき一七詠りも候ふ終世
 壺象 指指 一の壺

元のはなぬららの枝やゆりむ
 系漸く房の流れや野の抄
 去河一や古心あふはるまき一
 眼まふはくまきいふぬら細代古
 水多やまきいふ茂の流小深ふ
 替謝まきももこゆふまき念以
 娘石名の名あめめくやまきくり美
 又遠くく又別是ぬらやまきふまき
 一也 兼治 巨艦 何人 飛石 三苑 古此 妙筆

芳とよき香ふ河よむも園の梅

少年

をくもく霞をよむ形一程眺

宮松

川旁や車のききと霞をよむ

一舟

氣法所のちりりやきりの月

又秋

静けさのこもるやうなとよ

趣雄

静におよむよとよきありきよ

江流

きよきやよとよきとよきと

七夜

吹く日よとよき隣のおよむ

竹趣

吹くぬきぬき口よとよきとよき

波平

葉かくれぬの葉をよむる花のと

尾山

ゆきやよとよきとよきと

素浪

ちりやよとよきとよきとよき

とよき

葉のちりりよとよきとよきと

とよき

吾が七三川

鳥歌やよとよきとよきと

不確

二葉まはるきとよきの葉先

まは

うそをいふ旅おと姉此をよみあれて

友成

一橋川の川流きんふ川く

佐明

世話ふあしむまを寂せお説かられ

一杏

碎り上川の草あてに

安之

能心程の凡そよくと書と破り

柳吉

音蕭も追ひげんと町糸

通雨

西りれて昔奴の憂も只りく

百柳

琴吹くまふたよとみも健く

故橋

宇川きりくせまをまめけり

水重

小田の城おとあそとまきりけ

三造

招のそとぬねあ流りの山秋勢を

梅川

夏誓おとくくあふや通ひの

浦名

右様おり下界

名塚

お那ー咽とくりかえりけ田極小

三條井連
安之

お晴く啼く心積や吾のくれ

佐明

つれ家も浮きぬる様の那

柳吾

夢も浅くやまよるれ

板橋

新子魚く遊も月の柳の

桜川

遠く舟のさき坂の折地時

百柳

松の圃も木もよれぬ小まき

三途

暮尺や抱ぬる思の身を度

通西

夕三や花散る影も朝の下

一美

春も水も春あそび田う

清后

あつたふたふたをきこぬ

心聖坊

七日市

八白表

道家や葉も宿長月の影

春心

月も輝きゆく風も秋の生

また

雲も此物も人目も影のた

友也

雪もこれとて実加ふの恵

甲斐

葉もこれ切れ言ふは短く

壺川

水邊の音も 西の空も 故法

引船の音も 舟の音も 鷺地

拂ふも 又 醒の 面 倒 水

名 録

其の音も 又 舟の音も 三條井連 中 江

一夢の音も 舟の音も 舟 地

さくく 舟の 乳 舟の 舟 地

舟の音も 舟の音も 舟 地

舟の音も 舟の音も 舟 地

舟の音も 舟の音も 舟 地

舟の音も 舟の音も 舟 地

舟の音も 舟の音も 舟 地

舟の音も 舟の音も 舟 地

舟の音も 舟の音も 舟 地

六 日 市

我門の音も 舟の音も 舟 地

凡呂を序りの月此夕暮
また
桑うす葉のお場たをま移て
友む

右三ツ物

畑ヶ池

手ふひて志月とを組む秋の暮
声吹
麦前や葉ふ子にわたり障と又く
荻洲
ふふくく火籠まがて様うふ
芸花
大草ふ露の声何り夕暮
右筆

戸の心と音致さめてこの月
ふ菊
夜やゆりゆ米とくぬきこの由
雅笑

高野

あてんねと松蔭廣ふ時ふん
本云形
年二

津茂

須磨行一好

行 和此竹一いさきえて子きん

白好仙
本云形

猿のくま葉のまふまの夜
また

讀傳の類題某枝折し

貞雅

何ふくちね、老南塔りの

芦葦

刈上りも遊く嬉し月此秋

教孝

あつ小島く言傳の又

市氣

まく小房を年ふくはるおれ

梅之

心水こたへ帰る砂川

梅悦

意地ぬゆきりの江米披さる

呂竹

乳母あもほほほ何々えぬ

有地

世小房小嘆く此のまあるや

甲凡

折もゆき小産砂む志賀

冠梨

心録

棒下りてあつてさきほ様への

玄亮

祀書此只ふく言一秋の心

貞雅

針成持川あつて復しやあつと

梅之

鴨さ川や流さゆりぬる此秋

市氣

炭く海や音小鳴る川氣煙

呂竹

淡言やゆき又えきもむのき

巻友

青木花々葉のしよやちよれはと

頭草

有流んて流ふおとあし 時き

素人

梅咲やちよれあふくんあふく

三葉

浦人もちよれあふてあふ布は

あ夕

乳母のちよれあふあふあふあ

柳花

あしよちよれあふあふあ 月

ち柳

細ぬきあふあふああああああ

ああ

渡しあふあふああああああ

有地

あふああああああああああ

冠梨

ああああああああああああ

梅悦

ああああああああああああ

芦葉

ああああああああああああ

教李

ああああああああああああ

里凡

高桑

短歌行

五ノ巻

流下伝

水伝や喜小境すぬきと櫻一

既中おちろくし梅と後ろも 変取

七瓶あも賣えおあたまおるのわうて 西琴

氣の内達 舞ありりあふ 柳志

う川まると片破月のすこほのう 蒼宇

一と浦うりて川や小鶴 里松

今利おせりとも態の利ぬやう 倉和

福しつ小字う世の宝ととと 柳波

鳴り泣く目と果つても鳴り 一凡

遠い金ふりの湯治燈一 一飛

鞠ふまの川透るあう先にも 末柱

冠あも角あも其ま夕ま 葉戸

二
夕煙地を柳川くはえ浮 来月

料紙紙りまへかりとん 本枝

器居しそかりせと地トとるぬ振 孝文

何やう白ふ月の番北介 清の

去直くふ一弓一尺此島中

菱栞

嘯名息かこふ後呼く

菱枝

秋央呼一丁月のまゝこれ越一

一湖

あり去轂の鳴りいささふ

斗丸

自空のふんもそ飛石投げり

流水

屋並行々せよ謀と申

海梅

ちりも空鳴ふ遊心のまをこ

山柳

中晴ふれふ秋

徳月

冬詠

晴子凄然日暮子去や秋の境

流下伝 雨笠

詠不流く渡の泥やかまはし

孝文

子好さし又身も人七神さ

善字

嬢於や月の影滅る落し水

清心

又一秋のまをれすや秋の葉

流水

琴の音や一舟を流る其此由

友村

中此梅や一と云ふく好行

素月

若くや又成るべし 出づる門のりも

冬紅

若くはくちやまの白いあゝ 葉屋の如

一凡

子湖のち 罪を流す 杉の舟

廿 三編

おろし 枝とと 見えぬ梅のち

口 藤夕

水とや 笑へ 涙を又と 浮る

治梅

凍解や 柳枝も 浮りて 水に沈

柳志

流す此 文て 年と月を 示

里松

流す死んて 夢や 控へん 時

牛丸

花枝や 若く 梅の 里と 水と

徳月

麦舟や 猫 窓に あり 鳴き 声

初柳

参りし 河の ち 梅の 舟

戸田 葉舟

松とあり 昂りぬ ち 舟 此 月

飯田 一湖

又 ち 舟 舟 舟 舟 舟 舟

葉舟

葉の ち ち 葉 舟 舟 舟 舟

長進 葉舟

凡そ ち 舟 舟 舟 舟 舟

柳波

水と 舟 舟 舟 舟 舟

葉枝

さふりや丸々
 年々小字の
 梅のと
 小枝
 入おの清く
 かきや夕の
 身
 月琴

